

22. また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、
いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。

kai. panta u̇petaxen u̇po. touj podaj autou/
kai. auton erlwken kefalhn u̇per panta th|ekklhsia{

23. 教会はキリストのからだであり、
いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。

h{tij estin to. swma autou(
to. plhrwma tou/ ta. panta en pasin plhrounenouÀ
pt.pr.

説教

エペソ人への手紙はパウロが獄中で書いた手紙です。

使徒パウロは、エペソ人への手紙で、キリストの教会についての説明を展開しました。

1章では、

自分たちキリスト者が、
父なる神による選び、
御子イエスキリストによる罪の贖いと赦し、
そして聖霊によって福音を聞いて信じるという、
言わば三位一体の神の総出の霊的祝福を受けたこの世で最も幸いな者たちであることが説明されます。

そして、1章15節からは、

獄中のパウロがエペソ教会の兄弟姉妹のために祈るところです。
彼は、自らが闘いと極度の苦しみとの中にありながら、
しかし、同時に同じく戦いの中にあるエペソの兄弟姉妹のために祈りました。
いったい何を祈ったのでしょうか。
要するに、彼らが聖霊によってどんなに神さまの祝福を受けているかをよく悟ることができるよう祈りました。
神が与えてくださっている望みと相続分と力がどんなに凄いものであるのか、その威力を知ってほしいというのです。

それでは、その祝福とは何でしょうか。

一言で言えば、キリストを与えられたということです。

父なる神の力は、御子キリストを死人の中から生き返らせたほどのまことに前代未聞のパワーでありました。

そして、父なる神さまは、

その全能の力によって、

一切の支配、権威、権力を完全に超越して

すべての名の上に高く置かれた万軍の王キリストを、何と教会にお与えになったというのです。

22. 神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、

いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。

そして、パウロは教会が何であることを説明します。

23. 教会はキリストのからだであり、

いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。

教会とは何か、

キリストのからだである、

そしてキリストの満ち満ちたところである、これがパウロの教会理解でした。

それでは、

実際にキリストがどのような影響を私たちに及ぼしていくのか、

それを具体的に説明したのが2章以下であるということになります。

要約すると、

まず恵みによりキリストにあって永遠のいのちを与えられたということになり、

さらにはこの地上に平和な神の国の秩序が形成されていくということになります。

それでは、このようなキリストによる神の国は実際にはどのように実現していくことになるのでしょうか。

これが最も重要な課題となります。

キリストのからだとして、キリストが満ち満ちて、

キリストの栄光をあらわす教会とは一体どのようにして形成されていくのでしょうか。

そもそも教会とは何でしょうか。

教会の本質は何でしょうか。

何があれば教会で、何がなければ教会とは言えないのでしょうか。

教会が教会であるための最低条件は何でしょうか。

それは取りも直さず、教会の本質は何かという問題でもあります。

宗教改革者たちはみな等しく、これを「神のことば」と考えました。

教会が教会であるための最低条件を「神のことば」と考えたのです。

この場合、「神のことば」とは、**見えない**神のことばであるところの「神のことばの説教」を意味します。

そして、**見える**神のことばであるところの「聖礼典（洗礼式と聖餐式）」をも意味します。

つまり、彼らは、「神のことば」と「聖礼典」を教会の目印にしました。

ルターはこう定義しました。

「われわれの諸教会はまた、こう教える。

唯一の聖なる教会は永遠に存続する。

教会は、聖徒の集まりであって、

その中で福音が純粋に説教され、聖礼典が正しく執行される。」

教会とはキリストのからだです。

そこにはキリストが満ち満ちていなければなりません。

そのキリストはどのように教会に満ち満ちているのでしょうか。

信徒ひとりひとりの笑顔によってでしょうか。

信徒ひとりひとりの善い行いによってでしょうか。

彼らの善良な人柄や人格によってキリストはご自身の満ち満ちた栄光をあらわされるのでしょうか。

あるいは、会堂の大きさや煌びやかさによってでしょうか。

あるいは、その教会の知名度や、

政治に関わっているとか、幼稚園やっていると、

福祉施設やっているとというような社会に於ける活躍ぶり、

あるいは、教会に集まる人々の人数によって、キリストはご自身の栄光をあらわされるのでしょうか。

勿論、そのようなことが可能であるなら、それでもよいかも知れません。

でも、単に笑顔や善い行い、人柄を売り物にするというのなら、

統一協会やエホバの証人といった異端の方が得意かも知れません。

否、商売人やセールスマンの方が何倍も優れているでしょう。

彼らは生活がかかっていますからね。

必死に自分の良いところをアピールし、とびきりの笑顔をもって接客します。

テレビでもやっていますね。

「とびきりの笑顔でお待ちしています。」と芸能人を広告塔に使ってサラ金がジャンジャン宣伝しています。

また、建物の大きさなら、この世の会社組織や役所の方がずっと大きく立派な建物をこしらえます。

集まりの多さなら、その近所にある創価学会の方がたくさん集まっているでしょうし、

社会的な活躍ぶりなら、（それが本当に良い働きかどうかは別として）社会に与える影響の大きさであるなら、

やはり同じように、異教、邪教である創価学会の方がキリスト教会よりもはるかによく社会で活躍しています。

社会福祉なら、共産党の方がもっと熱心です。

ですから、キリスト教会の中で「自分の教会は何千人集まっている」と言っても、そんなことは少しも自慢になりません。

異教や邪教、異端の方がずっとたくさん集まっています。

大きな会堂建てたというのも、自慢になりません。

東京都庁より大きなもの建てたんですか？

私たちは惑わされてはなりません。

教会の本質を見誤^{みあやま}ってはなりません。

私たちが、教会とは何か、その本質を見失う時に、ただの世俗的な価値観でしか教会を評価できません。

ただの器、外見でしか評価できません。

聖書的に、正しく評価しなければなりません。

愚かで罪深い人間の目で見た評価でなく、神さまから見た評価で評価しなければなりません。

神さまがどう見ているか、

神さまがそれをどう評価なさるか、

神さまの目から見て、その教会は本物の教会かそうでないかを正しく評価しなければなりません。

そうじゃないと、

その教会は愛がない、笑顔で送り迎えしてくれない、会堂が小さい、集まる人たちが愚鈍だ、社会的にマイナーだ、そういう極めて世俗的な評価でしかその教会を評価できなくなってしまいます。

みなさん、教会で一番大切なものは何ですか？

何を求めて教会に来ますか？

教会とは何ですか？

何があれば教会で、何がなければ教会ではないですか？

いったい、何が教会の本質なのでしょう？

どんなに集まっている人たちの

人柄が優れ、頭脳が明晰で、笑顔や善い行いに秀でていても、それは全然教会ではありません。

どんなにたくさん人が集まっても、会堂が大きくても、そのようなことは、教会の本質と何の関わりもありません。

あるいは、

どんなに社会で活躍しても、

社会に影響を与えても、

歴史に名を残すほど有名でも、

でも、そのようなことは、教会の本質と何の関わりもありません。

ある時一世を風靡して、時代の寵児として大活躍したのに、実は後でその歴史的な評価が180度変わる場合もあるのです。

賀川豊彦とか、木村末松のように。

みなさん、

教会で最も大切なことは「神のことば」です。

みことばの説教と聖礼典が何より肝心です。

異教や異端の教えでは、いくら説いても少しも教会にはなりません。

ルターが言うように、「その中で福音が純粹に説教され、聖礼典が正しく執行される」、それが教会です。

教会にはいろんな人が集います。

中には、

異端や反キリスト、

ユダのような裏切り者や将来の永久破門者が、厚顔にも洗礼を受け羊のなりをして教会に所属しているかも知れません。

大半がそのような人で一杯で埋め尽くされた教会は、一体どうしたらいいのでしょうか。

でも、集まっている人たちがどのような人であるかは関係ありません。

集まっている人々の信仰の質が問題なのではなく、

そこでどのような教えが説かれているかこそが重要です。

彼ら罪人を教え導き悔い改めさせる「神のことば」が重要です。

死人をよみがえらせる神のことばが重要なのです。

どうせ集まっている人々全員が罪人なのですから、

しかも、どれほど罪深いかといえば、実は一人も例外なく、

死ぬほど罪深い、あまりに罪深く、神の怒りを受け、即刻地獄に落とされて、殺されるほど、罪深いのです。

だからこそ、人ではなく、教えが大切です。

教えがいのちです。

そのような罪人たちを教え導く「教え」が教会のいのちです。

「神のことば」が教会のいのちなのです。

使徒パウロは、

同じエペソ人への手紙の5章で、

キリストが「みことばにより、水の洗いをもって」教会をきよめて聖なるものとなさると言いました。

パウロのよると、

キリストが教会をきよめて聖なる栄光の教会となすのは、「みことば」と「水の洗い」すなわち聖礼典によるのです。

キリストは、みことばと聖礼典によって、教会をきよめて聖なる栄光の教会になさいます。

神のことばを語り、語り、また語り、

徹底的に語り続けていくことで、キリストは教会をきよめ、世界もきよめていかれるのです。

聖礼典（洗礼と聖餐）の執行は、

要するに、誰に聖餐にあずからせ、誰に聖餐を受けさせないようにするかという問題であり、

神の戒めに背く者へのいわゆる戒規（戒告、聖餐停止、除名）の正しい執行をも含む問題です。

この戒規の正しい執行を通して、教会の兄弟姉妹はみことばの教理を侮ることができないことを学びます。

そして、神のことばに従って生きていくことを学んでいくのです。

戒規の正しい執行を通して、罪を犯した本人が罪を悔い改めて神の栄光を見ます。

それから、教会の人たちが神を畏れることを学んで神の栄光を見ます。

そして、世の人も神を畏れることを学んで神の栄光を見るのです。

神のことばが人を新しく生まれ変わらせます。

神のことばは世界を新しく造りかえます。

だから、牧師は真っ直ぐに神のことばを語らなければなりません。

妥協してはなりません。

純粋に神のことばを正しく語ってこそ、

キリストの栄光が教会に現れ、人々はキリストの栄光を見るのです。

神のことばは教会のいのちです。

宗教改革者ツヴィングリはこう言いました。

「預言のわざ、あるいは説教を、私は最も聖なるものと信ずる。

それゆえに、これは他のすべてにまさって、最高に必要なものである。」

彼は、説教の働きが、

単に人々に罪の赦しと平安を与えるのみならず、

人々が罪を悔い改めて主に従って生きていくよう働きかけることだ言います。

彼は神のことば以外のものを教会から徹底的に排除しようとした。

ですから、説教に賭ける執念は凄まじいものがあります。

1524年にツヴィングリが書いた「牧者論」を読むと、

神のことばを語る牧者がいかにあるべきか、反面教師となる「偽りの牧者」についてこう言っています。

ツヴィングリはマタイ7章15-16節のみことばを引用して「偽りの牧者（狼）」をこう見分けるよう言いました。

- 一．たとえすでに牧者、司教、あるいは王と呼ばれていようとも、すべて宣べ伝えることをしない者は狼に他ならない。
- 二．たとえすでに宣べ伝えていようとも、神のことばではなく自分の夢を教えている者は狼である。
- 三．たとえ神のことばを教えていようとも、
神の栄光のためではなく、己れ自身と自らの首長なる教皇を念頭に置き、
その捏造した高い地位を守るために教える者は、羊の皮をまとしてやって来る凶悪な狼である。
- 四．たとえ確かに教えており、しかも神のことばによって教えていようとも、
最大の躰きである首長（教皇）に触れることなく、
その専横をなすがままに放置する者は、お追従使いの狼、あるいは民を裏切る者である。
- 五．自分が言葉で教えていることを行いをもって実行しない者は、
キリスト教国民の間で、言葉をもって建てるよりは、行いによって打ち毀す方が多い。
- 六．貧しい者を顧みることなく、圧迫され搾取されるままに放置する者は、偽りの牧者である。
- 七．牧者の名を帯びながら、世俗的な支配権を振るう者は、最悪の人間狼（werwolf）である。
- 八．富を集積し、財布や皮袋、倉や地下室を一杯にする者は、まことに人間狼である。
- 九．最後に、教えによって神の認識と愛、
子としての恐れ以外のものを人々の間に植え付けようと企む者は、偽りの牧者である。
ただちに彼らを羊の群から引き離さない限り、彼らは群れを貪り尽くすであろう。
- 十．そこからまた、創造主から被造物へと誘い行く者すべては、偽りの牧者であることが容易にわかる。」

ツヴィングリがこう指摘する背景には、教皇派の教職者の墮落がありました。

次のように当時の状況を記しています。

「信仰深き神のしもべよ。剣を手中にしている権力者の大多数が貪欲、傲慢、暴虐に満ち、自らを高くし、欲しいままに欲望を満たすことのみを意を用い、神を愛し、畏れつつ義に仕えるつもりのないことは、あなたの目にする通りである。少なくとも、本来の意味での義と呼べるようなものに仕えるつもりは、彼らには全くない。自分より弱い者に対してはただ戦い、強奪、争乱のみを事とする。さらに、自分たちの間では、泥酔、遊楽、淫蕩、悪徳、舞い踊りのみである。敬虔な牧者よ、頭について語るならば状況はこれほどまでに悪化している。だから、どうしたら良いのかを本気で考えるべきである。もしもあなたが語り出さないならば、滅びる者の血があなたから求められることは、上でも述べたとおりである。」

このような墮落した状況にあって神のことばを真実に曲げずに語るなら、

「教皇派は多くの君公らに手を回し」て猛然と迫害をしてくると言います。

しかし、だからといって「もしもあなたが語り出さないならば、

滅びる者の血があなたから求められ」、

「あなたは、狼を目にするやいなや羊を捨てて逃げ去る不実な羊飼い（ヨハネ10:12）のうちに数えられる」と言います。

そして、ツヴィングリは、説教者はそれに負けることなく、妥協せずに神のことばを語るよう主張します。

「しかして、説教が何を説教すべきかということは、

前述した事柄からも十分に明らかに理解できたはずである。

すなわち、ただ神のことばのみが説かれるべきである。」

そして、ヨハネ10:11「良い羊飼いはその羊のために命を捨てる」のみことばを引用しながら、

「あなたも良い羊飼いのうちに数えられようとするならば、その羊のために命を捨てなければならない。」と言います。

ツヴィングリのこのような牧者像はキリストご自身から学んだものと言います。

「そこで牧者はキリストを見上げてまつことが大切である。」

「わたしはわたしの羊のためにいのちを捨てる」と言って実行されたキリストは、

神のこぼを妥協することなく真っ直ぐに語って死なれたことで模範を示されたと言います。

「貪欲な坊主ども、学者、権力者たちからの批判をものともせず、彼らの貪欲、虚栄心、偽善という罪過をことごとく、民衆の前で鋭くかつ厳しく指弾された（マタイ 23:1-33）。.....敵がキリストを捕らえようとしてやって来た時、キリストは進んで彼らに歩み寄られたが、それは牧者がその羊の身体的危険をさえも守り防がねばならないことを示すためであった。.....こうして、キリストはそのいのちを我々のために捨てられたのである。それゆえに、牧者たる者はすべて、キリストの羊の牧者である限りは、神とそのまことのみことばの故に、またキリストがその羊に対して抱かれる真実の故に、これに迫害を加える者たちに対して立ち向かわなければならない。たとえそれがアレクサンドロス大王やユリウス・カイザルであろうと、教皇や国王、諸侯あるいは権力者であろうと、反対を唱えなければならない。」

このように、ツヴィングリは、福音宣教に関して一切の妥協を許しません。

「つい最近のこと、司教は一人の司祭をある教区に任命したが、その時司教はこの司祭に要望して言うには、（聖職者の）身分を一語でもそしるようなことがあってはならない、また福音を宣べ伝えるに当たっては、誰かを非難する程度まで行ってはならない、と。これでは哀れな牧師は一体何を説教できようか。全世界が悪徳に沈潜しているのに、これを叱責してはならないというのであろうか。それ以外の何が牧者に求められているだろうか。福音はなにびとをも咎め立てしない、と良き主の言われたことは私も十分に承知している。司教殿よ、目を見開いてマタイによる福音書 23 章（1-33 節）、および同 3 章（2 節）、ヨハネによる福音書 8 章（1-59 節）、同 3 章（1-36 節）、その他、多くの箇所を見るがよい。そうすれば、キリストおよびヨハネがどのように語り、行動したかがわかるであろう。」

そして、ツヴィングリはこう呼びかけるのでした。

「ここから牧者はよく知らなければならない。すなわち、たとえ全世界が彼に逆らい立とうとも、神のこぼに雄々しく踏み留まり、多数のバアルの祭司を恐れてはならない。そして民が二つのものの中で迷って、『私は神を信ずる。しかし祝福された被造物をも信ずる』などと言うような誤りに陥らないようにすることが大切である。.....牧者がすべての悪にどのように立ち向かわなければならないかについて、これ以上多くの預言者たちから例を挙げる必要があるだろうか。預言書を手にするならば、そこに見出されるのは、この世の権力者と悪徳との永遠の戦い以外の何物でもない。」

そうして、イザヤ、エレミヤ、エゼキエル、アモス、ヨナの戦いを挙げ、さらにはバプテスマのヨハネの例を挙げます。

「...ヨハネは、ヘロデが以下に凶暴かを知っていた。民衆の間では、その恥ずべき生き方について語ることさえ許されないほどであったが、しかも見よ、だからといってヨハネは何一つ見過ごしにすることはなかった。だれひとりとしてヘロデを咎めようとしなかった時、彼はそのもとに赴き、その悪徳を非難して言った。『あなたは兄弟の妻をめとるべきではない』（マルコ 6:18）しかし、ヘロデはこのような悪行をあえてし、ヨハネは捕らえられ、殺害された。そこから牧者の学ぶべきことは次のようである。君候や民衆や司祭らの間で行われていることすべてに於いて、だれもこれに触れようとしないう場合、大きさや強さや数やその他何物によっても脅かされることなく、神が命じられるや否や、たじろぐことなく、彼らが悔い改めるまで叱正を続け、例外を作ってはならないということである。」

こうして、ツヴィングリは次のように結論します。

「権力の座にある者が、それにふさわしい行為を、あるいは偽りから、あるいは恐れから果たされないような場合でも、預言者はけっして眠りこけていてはならない。当局者が協動的である場合には、それだけ穏便な方法で悪徳を除去することができようが、万一そのようでない時にも、牧者はそのために一命を賭すべきであって、神以外からの助けや救いを期待してはならない。要するに、エレミヤ書 25 章および 29 章にあるように、神はいつでも時宜になんて罪深いこの世に警告を与えるためにその預言者を遣わすのであるから、見張りや警告の役目をなおざりにしてはならない。一度警告が与えられたからには、もはや悔い改め以外の何物も役に立たない。そうでないならば、いっそう大きな災禍が起こるのであろう。」

「牧者はそのために一命を賭すべき」といったくんだり、
さながら神社参拝の強制に抵抗して殉教した朱基徹牧師の
有名な説教「預言者の権威」に出てくる「一死覚悟」を見る思いであるが、
ツヴィングリの説教に賭ける凄まじい執念と確信が伝わってくるように思えます。

ツヴィングリにとって説教（福音宣教）とは、
ルターようにそれを宣教して人々に信仰義認と救いをもたらすというのみならず、
その先をも同時に意味するのであり、救われた人、救われない人を含め、とにかくこの世界を改革するものです。
ツヴィングリにとっては、
たとえ相手が権力者であろうと
彼らを悔い改めさせて神のみこころを行わせて世界を変革するもの、それが神のことばなのでした。
ツヴィングリには、神のことばこそが人を造りかえ、世界を造りかえるという絶対的な確信がありました。
それで、この神のことばが持てる力を十分に発揮するには、
罪の世と妥協せずにこれをそのまま真っ直ぐ語る必要があります、
そのためには、キリストが模範を示された通りに、そして、旧約の預言者たちがそうした通りに、
「牧者はそのために一命を賭すべき」なのであって、言わば「一死覚悟」して語るべきを語らねばならないと言うのです。

**教会はキリストのからだであり、
いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。**

神のことばが人を新しく生まれ変わらせます。
神のことばは世界を新しく造りかえます。
牧師が神のことばを純粋に正しく語ってこそ、
キリストの栄光が教会に現れ、人々はキリストの栄光を見るのです。
神のことばは教会のいのちです。

パウロは言いました。

**6:19 また、私が口を開くとき、語るべきことばが与えられ、
福音の奥義を大胆に知らせることができるよう私のためにも祈ってください。**

**6:20 私は鎖につながれて、福音のために大使の役を果たしています。
鎖につながれていても、語るべきことを大胆に語れるように、祈ってください。**

牧師のために祈ってください。
福音の奥義を大胆に語れるよう祈ってください。
そして、みことばに従って生活してください。

そして、今度はみなさん一人一人が、世に出て行ってみことばを宣べ伝えてください。
教会では牧師が神のことばを語って神の栄光をあらわします。
でも、世の中では、信徒のみなさん一人一人が牧師です。祭司です。
みなさんが神のことばを語って神の栄光をあらわさなければなりません。